

主体性を育てる学習指導

戦後の生活経験を中心とした問題解決学習は、子どもの興味や意欲を高め、考える学習としての主体性を育てようとしたところに特徴があった。しかし指導内容の系統性が軽視されたために学力低下の批判を受け、教科学習の系統化が強調されてきた。この系統化を学問的系統の面からのみ考えるのではなくて、学習主体としての児童の心理発達系統と教材系統との一体的把握の上に学習が展開されなくてはならないと考える。

そこで、昭和 35 年から 3 年、次のことを意図して研究を進めてきた。

- ・断片的な知識・技能でなくて、相互に緊密に関連し合った、構造化された知識や、子どもの人格としてよく統合された態度や技能をめざして、真の学力や人格の向上を意図した。
- ・教材の系統をおさえながら、枝葉末節の教材をはぶき、重要で本質的な教材をよく焦点づける。それらを子どもの心身の発達のリズムに合致させ、子どもの思考過程や心理過程に沿って、効率や効果の高い学習指導をめざす。

この研究の上に立って、さらに深化発展させるとともに、現代社会が強く要求している、主体的・創造的態度の育成をめざして昭和 38 年から、主体性の確立をめざす学習指導は、どう体制化しなくてはならないかを追求してきた。

わたしたちはまず、子どもの興味や意欲をもり上げながら、子ども自らが学習方法を学びとるためには、教材の系統や構造を重視し、子どもの中に、過去をはらみ、未来へ発展拡充するような、真の学力がつくためには、どう展開していくかという指導過程を追求した。

さらに子どもは、何らかの組織の中において思考し活動しているのであるから、そうした場が主体性を育てるように構成されなくてはならないと考え、学習形態の研究に取り組んだ。わたしたちは、学習形態を教師と児童相互の人間関係の組織の面からとらえ、個人学習、小集団学習、一斉学習に分けて考えたのである。この三つの形態を、児童の実態や教材内容に即して有機的に学習過程に位置づけようとしたのである。

さらに、教師の発問助言、あるいは資料教具は、直ちに児童の学習意欲に影響して、学習の効率を左右するものである。したがって、過程や形態との関連において、主体性を育てるという観点から実践的に考察をしたのである。

以上、「主体性を育てる学習指導」における研究の角度をいくつかあげたが、これらが体制化されなくてはならない。すなわち、相互に関連しながら、いくつかの原理によって総合されなくてはならない。それを理論的に解明し、研究の方法と概要を述べたのが第Ⅰ章、第Ⅱ章である。その具体的な姿を実際の学習指導の中に求め、授業分析を繰り返しながら理論をどう活かすかをくふうし、また実践を通して理論を確立してきた。

学習指導は複雑な構造を持っているため、いたる所で問題の解決に悩んだのであるが、現段階において、各教科および道徳で到達した研究の結果をまとめたのが第Ⅲ章である。

なお未熟な点、不備な点もあることと思うが、多くの研究家、実践家のご批判を賜りたいと思っている。

この研究を進めるにあたって、本学の大賀一夫教授（昭 36・4～40・3 当付小校長）から、ひとかたならぬ、指導を賜ったことに対して深く感謝の意を捧げたい。

また、発刊を心よく引き受けてくださった明治図書、特に編集部の江部満氏・樋口雅子氏に対してお礼を申しあげる次第である。

1966 年 1 月

福岡学芸大学附属久留米小学校

校長 古賀 勝